『中国東北地域における戦前の都市計画及び戦後の都市再建の研究―長春市を中心に―』
要旨

博士論文『中国東北地域における戦前の都市計画及び戦後の都市再建の研究―長春市を中心に―』は歴史軸によって第一部と第二部にわける形をとる。第一部は第一章から第三章まで、第二部は第四章から第六章までとする。資料については、戦前に関することは、戦前の新聞資料、及び満鉄創刊の資料、国民党政府高官の日記や調査報告書を主に使用した。戦後に関することは、中国の各都市の年鑑、共産党幹部の報告書、日中双方の関係者の回想録等を主に使用した。また 2005 年に行ったフィールドワークと 2010 年に行ったフィールドワークの結果についても、使用した。

序論

序論では、第一節に於いて満洲国建国までの概観を述べ、建国以前の中国東北地域がどのような状況であったのか歴史的事実に即しながらみた上で、満洲という地域の特徴をみてみた。満洲国時代の発展の様子及び、動きというものを人の動きと照らしてみる際にその一つの指標となり得るものとして、満洲国時代の人口の推移ついての表を挙げた。更に満洲国の発展の様子をうかがえるものの一つとして、面積についても触れた。また中国の東北地域の都市の起源を考察した。結果、1949 年の新中国成立以前の東北地域の都市発展と中華地域における都市発展の相違について先行研究等を踏まえながら、①都市の発展経緯の違い②都市の持つ機能の違い③都市構造の違い④都市と郷村における関係の違いという 4 点にまとめた。また日本における満洲関連の先行研究を年代毎に特徴づけて述べ、中国における先行研究についても述べた。

第一章

第一章では満鉄と中国東北地域の都市の形成の関係について長春を中心に考察を行った。満鉄の都市計画とは、日露戦争後に行われたロシアの東清鉄道との関係から派生し、東清鉄道が中国東北地域で行っていた統治を更に強固なものへとしていったものであるということを再考察することが出来た。また、都市計画においては後藤新平の都市経営の理念を継承することによって、比較的多くの病院や学校等といった公共的な施設が建設されていたことが分かった。後藤新平の都市経営の成功の可否は人口の増加数に還元できる部分があるのではないだろうか。またこれらの建築を手がけた建築家については各人を詳細に研究することが出来なかったので、これは今後の課題としたい。

第二章

第二章では、まず何故長春が首都として選定されたのかということをはじめとして、関東軍特務部と満鉄経済調査会及び国務院の三者による国都建設計画について考察を行った。

また国都の最高学府として設立された建国大学についても史料をもとに考察を行った。何故長春が首都として選定されたのかについては、先行研究を踏まえた上で、従来の研究では注目されていなかった臧式毅について取り上げ、人物の動きから国都選定の動きを追ってみたところに独自性がある。また国都建設期の事業の中でも教育機関、特に国の最高教育機関として設立された建国大学に焦点を合わせて、どのように建設が行われていったのかと考察することで、建国当時の慌ただしさと関東軍優位の都市計画について具体例を出すことが出来た。今後の課題としては国都建設事業期が３つの時期に分けられるが、その詳細な移り変わりについて触れることが出来なかったので、この点を課題としたい。

第三章

第三章では、国都の建築の建設にはどのような人物が携わっていたのか、またその建築様式とは一体どのようなものであったのかということについて考察を行い、相賀兼介が満洲国建国前から活躍しており、彼を中心に満洲国都の主要な建築が設計されたことが分かった。

また、国都の建築様式というハードウェア的では、様式について異なる見解があることを再考察し、その様式からどのようなことがいえるのかということを、懐柔策という点と盟主主義という二点から見てみた。

第四章

第四章では、①本当に国民党軍は破壊工作を行ったのか。②戦後すぐに国民党は東北地域に対して何を行ったのか又は何を行おうとしていたのか。③戦後すぐの東北地域はどういう位置にあったのか。という問題提起を行い、考察を行った。結果、①と②については、国民党は東北地域の接収工作を行い、政治経済の復興を計画したのであって、意図的な破壊工作は行われていない。東北地域の施設破壊は戦後すぐのソ連によるものと、国共内戦期の混乱によるものであると考えられるとまとめた。③については、日本統治の崩壊後、東北地域における国民党、共産党、ソ連という三つの勢力の角逐の場であったと結論付けた。

今後の課題点としては、「日本統治の崩壊後、東北地域における国民党、共産党、ソ連という三つの勢力の角逐の中で、満洲国の遺産が政治経済及び文化の再建過程にどのように継承されたか。」、また「アメリカの援助はどのように影響したか。」ということを挙げた。

第五章

第五章では、従来の研究で一番手薄となっており、研究蓄積の少ない復興期及び第１次５カ年計画期の中国東北地域の都市再建について考察を行った。本章では復興期（1949～1952）及び第１次５カ年計画期（1953～1957）の東北地域について考察を行った。また、何故当該時期の研究蓄積が少ないのかについても言及した。そして復興期の史料の少なさには、高崗 と東北地域との関係が多分に影響しているであろうことも指摘した。第５章においては、

史料の制約の中、長春における具体例を挙げることによって当該時期の様子に少しでも迫ろうと力を注ぎ、長春において第 1 次 5 カ年計画期に工業・商業・運輸業・不動産業等、殆ど全ての業種の私営企業及び住宅・不動産を所有していた個人が「公私合営」へ「自己申請」という形で「改造」され、社会主義経済へと進んでいったことを述べた。そして、この時期の順調な社会主義改造への道程の裏側には、戦前「満洲国」の首都であったということ、新しい都市であったがために有力な地元資本が少なかったこと等、長春市の特殊な事情が作用していたことを指摘した。

結論

結論では、何故今この研究をする必要があるのか、また更なる課題は何かについてまとめて述べた。筆者は 2004 年 8 月から 2005 年 6 月までの吉林大学留学中より、長春のある種の建築に対して興味を持って接してきた。以後、中国東北地域、特に戦前「満洲」と呼ばれていた地域の都市建築及び宗教といった都市文化活動について側面的な研究を行ってきた。

この「都市」というものは抽象的な概念であり、目では地図上でしか把握出来ない俯瞰的な面を持つものでもある。「都市」とは一体何なのだろうか。「都市」とは人の活動といったソフトウェア的なものも、建築といったハードウェア的なものも含んでいるものである。故に「都市」全体を知ることは不可能に近いものだが、その「都市」の一面を切り出していく中で、「都市」の構造や仕組みについて理解していくことを本論では目指した。

また、中国東北地域の「都市」について言えば、その形成には他の都市には見られない特徴、つまりロシアと日本による影響が多分にあらわれている。長春を例に挙げるならば、戦前の満洲国建国前と満洲国建国後では、その都市に与えられた性格が―対ロシアの機能と満洲国の国都としての機能―大きく異なっており、戦後は、戦前に培われてきた工業面の蓄積を糧として、中国の一つの都市として再建されていったという特徴が言える。

近年では、引用文献等でも取り上げているように、中国東北地域の事象について日中の共同研究も大分進められてきている状況である。しかし、ある一地域に特化して研究されたものが多く、総合的な研究はまだ十分にはなされていないのが現状だといえるだろう。また、戦前の中国東北地域に関する研究はその研究の蓄積はかなり多いものの、戦後の当該地域研究は最近注目されるようになってきたばかりの段階である。

そこで、従来の研究の問題点を多角的な面から指摘し、ソフトウェア的な面とハードウェア的な面から切り込むことによって、新しい視覚から中国東北地域の都市といったものを浮かび上がらせてみようと目指したのが本論である。その際、今までの先行研究の多くは。歴史の流れから見て断続的なものがそのほとんどであった為、本論では出来る限り歴史の流れに沿って事象を考察していくことを目指した。その中で従来の研究の空白部分を主に取り上げたが、中国東北地域、とくに満洲と呼ばれていた地域おける今後の研究の課題となってくるであろうと考えられる時期及び都市を扱う際に手薄になっている分野について指摘をすることに特に心掛けた。

今後の課題としては、建築関係から言えば、近年、長春の満洲国時代の建物が観光資源として取り上げられてきていることについて言及することが出来なかったので、この点をダークツーリズムという近年の研究の流れから見ていくことも今後の課題としたい。その際は戦後、新中国建築界の重鎮の一人である梁思成 を念頭に入れて考察を行っていきたい。何故なら、新中国になって梁思成が設計を行った建築物の中に「大屋根様式」と呼ばれるものがあり、満洲国時代の東北地域の建築と似ているものがあるからである。この点については、日本では管見の限りでは、まだ研究が行われていないので、かなり意義のあるものだと思われるからである。